

母性看護学実習における学生の看護技術経験の認識に関する調査

成 田 恵美子 渡 邊 竹 美 糠 塚 亜紀子
 篠 原 ひとみ 兒 玉 英 也

要 旨

本調査は、本学の母性看護学実習における学生の母性看護技術の経験状況を明らかにし、今後の学内実習や母性看護学実習の学習効果をあげるための資料とすることである。

母性看護学実習の対象である妊婦、産婦、褥婦、新生児に対して実施可能な技術を76項目選定した母性看護学実習経験録を作成し、学生はその経験録に病棟実習と外来実習で実際に経験した母性看護技術を記載した。その結果、対象別では、新生児に関する技術の経験割合が多く、18項目中10項目で80%以上の経験率であり、見学だけの経験を含めると11項目が該当した。また、外来実習では11項目中5項目が80%以上の経験率であり、見学だけの経験を含めると9項目が該当した。しかし、実際に実施や見学しているにもかかわらず、学生自身が記録していない項目もあり、意図的にかかわりを強化する必要がある。

はじめに

現在の養成所指定基準の臨地実習の占める割合をみると、看護師学校養成所指定基準では93単位中23単位(24.7%)、保健師学校養成所指定基準では21単位中3単位(14.3%)、助産師学校養成所指定基準では22単位のうち8単位(36.4%)である。指定基準の改定(現在の指定基準は平成8年8月改正、平成9年4月より実施)により臨地実習時間数が減少した。また、臨地実習における実践力の低下や就職時の実践能力の低下、さらに医療における安全の確保、患者の権利の擁護などの視点からも臨地実習において学生が経験できる技術が制限される傾向にあることから、厚生労働省では、平成15年3月の「看護基礎教育における技術教育の在り方に関する検討会報告書」¹⁾を提示した。

看護学教育において臨地実習は、学生が学内で学習した知識・技術・態度の統合を図り、看護実践能力の基本を習得するために不可欠な学習過程であり、同時に看護に必要なコミュニケーションを基盤とした人間

関係能力を育成・習得する学習の場であり、看護基礎教育における技術教育の現状と課題、臨地実習で学生が行う看護技術に関する基本的な考え方、身体侵襲を伴う看護技術の実習指導のあり方、対象者からの同意を得る方法などが記載されている。なかでも臨地実習において学生が行う基本的な看護技術について、教員や看護師の助言・指導により学生が単独で実施できるもの、教員や看護師の指導・監視のもとで学生が実施できるもの、学生は原則として看護師・医師の実施を見学する、以上の3つの水準を作成し、技術内容を具体的に示した。

一方、文部科学省では、平成14年3月に看護教育の在り方に関する検討会報告「大学における看護実践能力の育成の充実に向けて」²⁾を提示し、看護学の学士課程の教育内容のコアを構成する重要な要素として「看護実践を支える技術学習項目」を示した。この中では、人間を対象として活動する看護の基盤として『看護ケア基盤形成の方法』に8つの学習項目を示し、実践力を育成する基本的な技術である『看護基本技術』

では13項目の学習項目を提示した。さらに、平成16年3月に文部科学省の看護学教育の在り方に関する検討会では、「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」³⁾を報告し、学士課程における看護学教育を基盤とした看護生涯学習モデルを示した。

A大学は平成14年10月に改組され医学部保健学科となり、平成15年4月から大学として看護基礎教育を開始し、今年度完成年度を迎えた。この過程で「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書」「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」をふまえ、講座や分野の垣根を越え、臨地実習における学生の「看護基本技術到達目標一覧」⁴⁾を作成した。

母性看護学分野では、看護師養成所指定基準のうち母性看護学2単位および助産師養成所指定基準の助産学実習5単位の臨地実習を担当し、臨地実習の内容を検討してきた。母性看護学実習や助産学実習では、この分野に特有の看護技術が含まれ、身体侵襲を伴う技術も少なくない。

本報告は、必修科目である母性看護学実習における看護技術経験状況を明らかにし、今後の学内実習や母性看護学実習の学習効果をあげるための資料とすることを目的とした。

母性看護学実習の概要

1. 実習目的と実習目標

母性看護学実習では、「妊娠・分娩・産褥・新生児期の心身の変化を理解し、対象に必要な看護を実践する能力を養う」ことを目的とし、実習目標は以下の5項目である。妊娠・分娩・産褥・新生児期の生理的变化を理解する。妊娠・分娩・産褥期における女性の心理・社会的変化を理解する。妊娠・分娩・産褥

期における親役割獲得過程について理解する。看護過程を通して、母性看護の対象を理解し、母性看護活動に必要な知識・技術を習得する。看護実践を通して、母性看護の現状と課題について考察できる。

2. 実習方法 (表1)

実習は、1グループあたり10～11名で編成されている。この1グループをA・Bグループに分け、それぞれ5～6名でグループ編成し2週間(10日間)の実習とした。実習スケジュールは、A・Bグループごとに病棟実習4日間、外来実習1日(学生2～3名ずつ)、集団教育(母親学級)の見学実習1日、課題学習1日、学内実習1日とし、実習初日のオリエンテーションと最終日のまとめのカンファレンスはA・B合同で行った。

3. 学習内容

学習内容は以下の4点で、それぞれの学習内容ごとに目的、目標、方法を示した。

- 1) 病棟実習では、妊婦・産婦・1組の母子のいずれかを受け持ち、受け持ちケースを通して看護過程を学習する。また、産婦の心身の変化および分娩進行に伴うケアについて実践を通して考察する。
- 2) 外来実習では、1名の妊婦を受け持ち、妊婦健康診査の見学を通して、妊娠による女性の心身の変化を理解し、妊婦に必要なケアおよび保健指導を考察する。
- 3) 母親学級の運営に参加し、妊婦とその家族に対する集団教育の実際を学び、対象に必要なケアと集団教育のあり方について考察する。
- 4) 課題学習では、母性看護に関わる対象の身体的・

表1 母性看護学実習のスケジュール

		A グループ				B グループ			
		オリエンテーション (AM 学内 / PM 病棟)							
1 週 目	月								
	火	病	棟	実	習	課	題	学	習
	水	病	棟	実	習	外 来 実 習 / 学 内 実 習			
	木	病	棟	実	習	外 来 実 習 / 母 親 学 級 見 学			
		病棟実習 / ケースカンファレンス				カンファレンス / 学内実習			
2 週 目	月	課 題 学 習							
	火	外 来 実 習 / 学 内 実 習				病 棟 実 習			
	水	外 来 実 習 / 学 内 実 習				病 棟 実 習			
	木	カンファレンス / 母親学級見学				病棟実習 / ケースカンファレンス			
		実習のまとめ (カンファレンス / 自己学習)							

* 外来実習は1回につき学生は2～3名であり、外来実習がない学生は、学内実習となる。

心理的・社会的側面について、体験や調査を通して対象をとりまく現状と課題および看護の方向性について考察する。体験・調査内容としては、妊娠・出産・産褥・新生児用品の市場調査、避妊用具の市場調査、地域社会における妊婦・褥婦へのインタビューのいずれかを選択する。

調査方法

1. 対 象：看護学専攻4年生
2. 調査期間：平成18年4月17日～9月15日
3. 方 法
 - 1) 母性看護学実習経験録の作成
母性看護学実習経験録（以下、経験録と記す）は「看護基本技術到達目標一覧」を参照にし、母性看護学実習の対象である妊婦、産婦、褥婦、新生児に対して、実施または見学が可能な技術を対象別・実習場所別で選定した（表2）。
 - 2) 記載方法
母性看護学実習の初日のオリエンテーションで経験録を配布し、病棟実習4日間と外来実習1日の実習において、実施した項目には「」、見学した項目に「」、さらに具体的内容を記載する欄を設け、学生自身が記入し実習最終日に提出とした。
4. 分 析
経験録の記載内容をデータ化し、Excel 2003に入力し記述統計処理を行った。

5. 倫理的配慮

経験録は実習記録の一部であるため、調査の趣旨を文書および口頭にて説明し、経験録を調査データとして使用することに対して承諾書を提出した学生の経験録を対象とした。その際、協力の可否は成績に影響しないこと、承諾後の取り消しも可能であること、経験録使用にあたっては個人が特定されないことを文書および口頭で説明した。

結 果

調査に承諾した学生は65名であった。

1. 病棟実習における受け持ち対象者

受け持ち対象者の時期は、妊娠期12名（18.5%）、産褥期36名（55.4%）、分娩期から産褥期6名（9.2%）、妊娠期から産褥期11名（16.9%）であった。対象別で見ると、妊婦の受け持ちは23名（35.4%）、産婦の受け持ちは17名（26.2%）、褥婦・新生児の受け持ちは53名（81.5%）であった。

2. 病棟実習における受け持ち期間

病棟実習は4日間であるが、対象者の受け持ち期間は、1日1名（1.5%）、2日間8名（12.3%）、3日間15名（23.1%）、4日間41名（63.1%）で、平均受け持ち期間は 3.5 ± 0.8 日であった。妊婦の受け持ち期間の平均は 3.8 ± 0.4 日、褥婦の受け持ち期間の平均は 3.4 ± 0.8 日であり、褥婦の受け持ち期間のほうが短かった。

3. 病棟実習における看護技術の経験状況

病棟実習の対象は、妊婦、産婦および母子（褥婦と新生児）であり、対象者別に母性看護技術（以下、技術と記す）の経験状況を示す。

表2 母性看護学実習経験録の構成

項 目	場所と対象	場 所					外 来 実 習	
		対 象	妊 婦	産 婦	褥 婦	新生児	妊 婦	
観 察 に 関 連 す る 項 目		40	8	9	7	8	8	
日 常 生 活 の 援 助 に 関 連 す る 項 目		17	2	7	2	6	0	
育 児 技 術 習 得 の た め の 援 助 に 関 連 す る 項 目		4	0	0	4	0	0	
保 健 指 導 に 関 連 す る 項 目		4	0	0	3	0	1	
与 薬 の 介 助 に 関 連 す る 項 目		1	0	0	0	1	0	
診 療 の 介 助 に 関 連 す る 項 目		10	3	1	1	3	2	
合 計		76	13	17	17	18	11	

*産婦の観察に関連する項目には、出生直後の観察6項を含んだ内容である

1) 妊婦に対する看護技術の経験状況

妊婦を対象とした技術は13項目あり、観察に関連する技術8項目、日常生活援助に関連する技術2項目、診療の介助に関連する技術3項目である。

実施経験の多かった技術は観察に関連する項目で、「分娩監視装置 (cardiotocograph: CTG) の装着及び判読」29名 (44.6%)、「バイタルサインの測定」25名 (38.5%) であり、見学による経験が多かった項目は、「超音波検査時の介助」7名 (10.8%) であった。実施および見学を合わせて経験割合が低かった項目は、「試験紙法による尿検査」、「清潔の援助」各1名 (1.5%) であった。図1は、妊婦に対する技術の経験状況を示したものである。

2) 産婦に対する看護技術の経験状況

産婦を対象とした技術は17項目あり、観察に関連する技術9項目 (うち出生直後の観察に関連する技術6項目を含む)、日常生活援助に関連する技術7項目、診療の介助に関連する技術1項目である。

実施経験の多かった項目は、「胎児付属物の観察・諸計測」38名 (58.5%) で半数以上の学生が実施しており、続いて、「分娩直後の子宮の観察」16名 (24.6%)、「呼吸法」14名 (21.5%)、「産痛緩和」12名 (18.5%) であった。また、見学の多かった項目は、「出生直後の新生児の観察・諸計測」27名 (41.5%)、「出生直後の新生児の点眼」「出生直後の母子相互作用の観察」各24名 (36.9%)、「新生児のアプガールスコアの判定」23名

(35.4%) で、いずれも観察に関連する技術であった。全く実施できなかった項目は、「入院時の処置」と「出生直後の新生児の点眼」であった。実施および見学をあわせ経験の少なかった技術は、日常生活の援助に関する項目であり、「睡眠・休息」3名 (4.5%)、「清潔」「活動」各5名 (7.7%)、「飲食」「休息」各8名 (12.3%) であった。また、分娩見学ができた学生は34名 (52.3%) であった。図2は、産婦に対する技術の経験状況を示したものである。

3) 褥婦に対する看護技術の経験状況

褥婦を対象とした技術は17項目あり、観察に関連する技術7項目、育児技術習得のための援助技術4項目、保健指導に関連する項目3項目、援助技術2項目、診療の介助1項目である。

実施経験の多かった項目は、「バイタルサインの測定」52名 (80.0%)、「子宮復古の観察」49名 (75.4%)、「浮腫の観察」45名 (69.2%) で、「乳房の観察」「母子相互作用の観察」「育児技術の観察」についても60%以上の学生が実施していた。見学が多かった項目は、「授乳指導」「沐浴指導」各26名 (40.0%)、「授乳」25名 (38.5%)、「乳房ケア」24名 (36.9%) であった。また、実施および経験をあわせ経験の少なかった項目は、「調乳指導」9名 (13.8%)、「体重測定」「外陰部の消毒」各15名 (23.1%) であった。図3は、褥婦に対する技術の経験状況を示したものである。

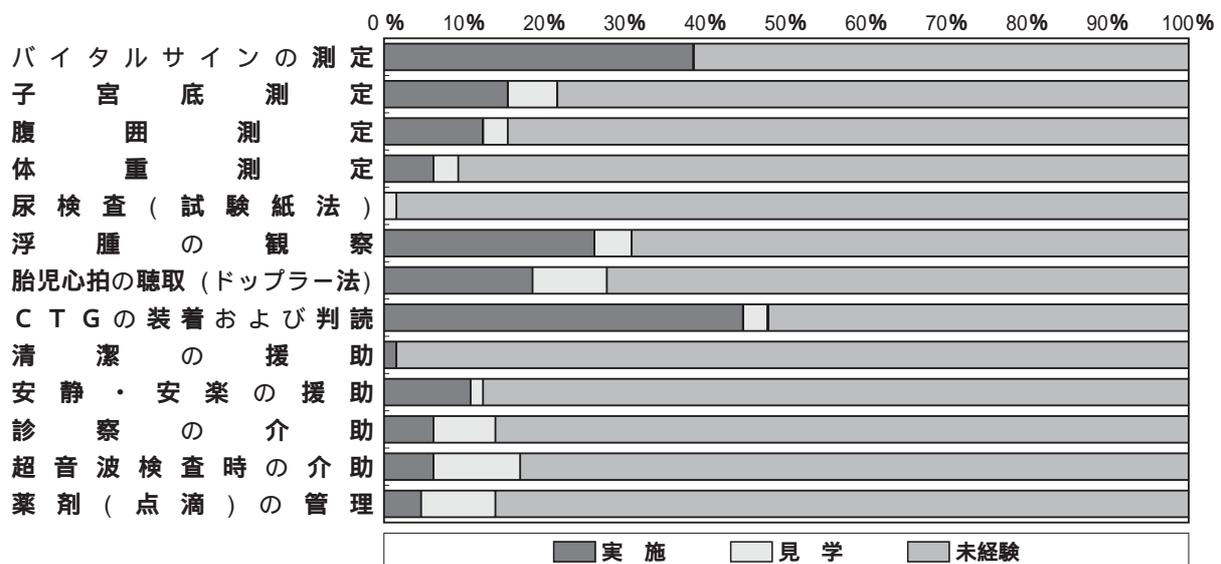


図1 妊婦に対する看護技術の経験状況

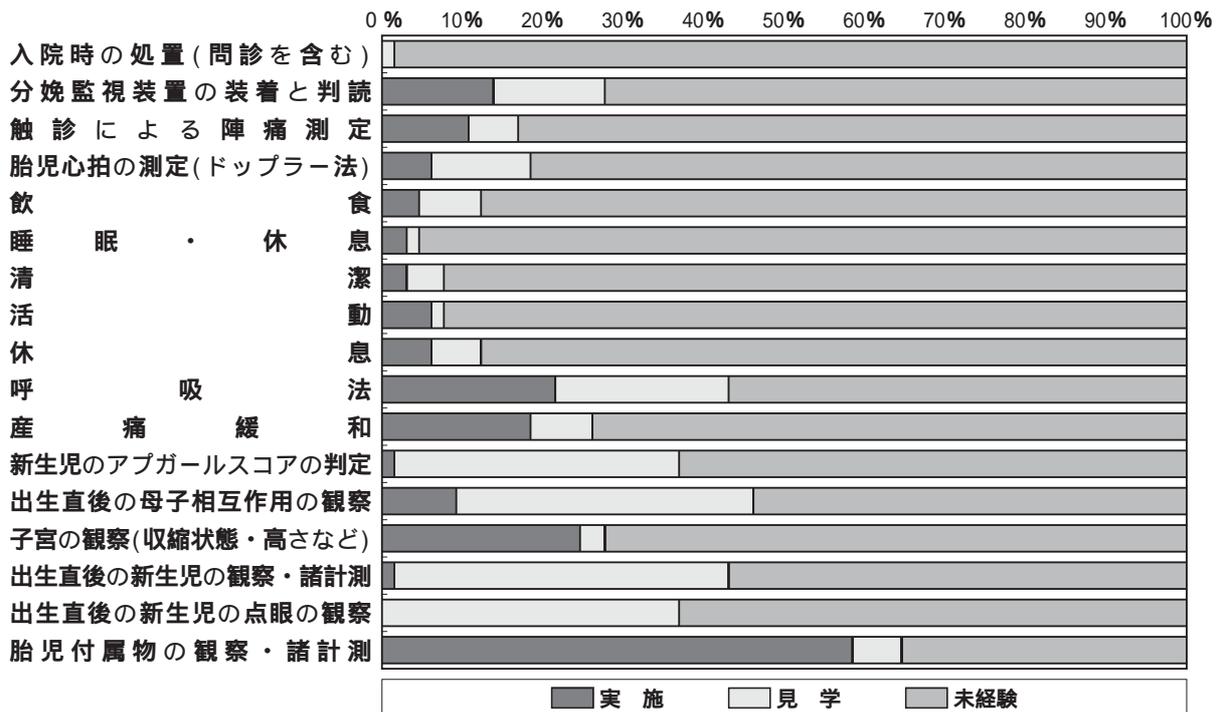


図2 産婦に対する看護技術の経験状況

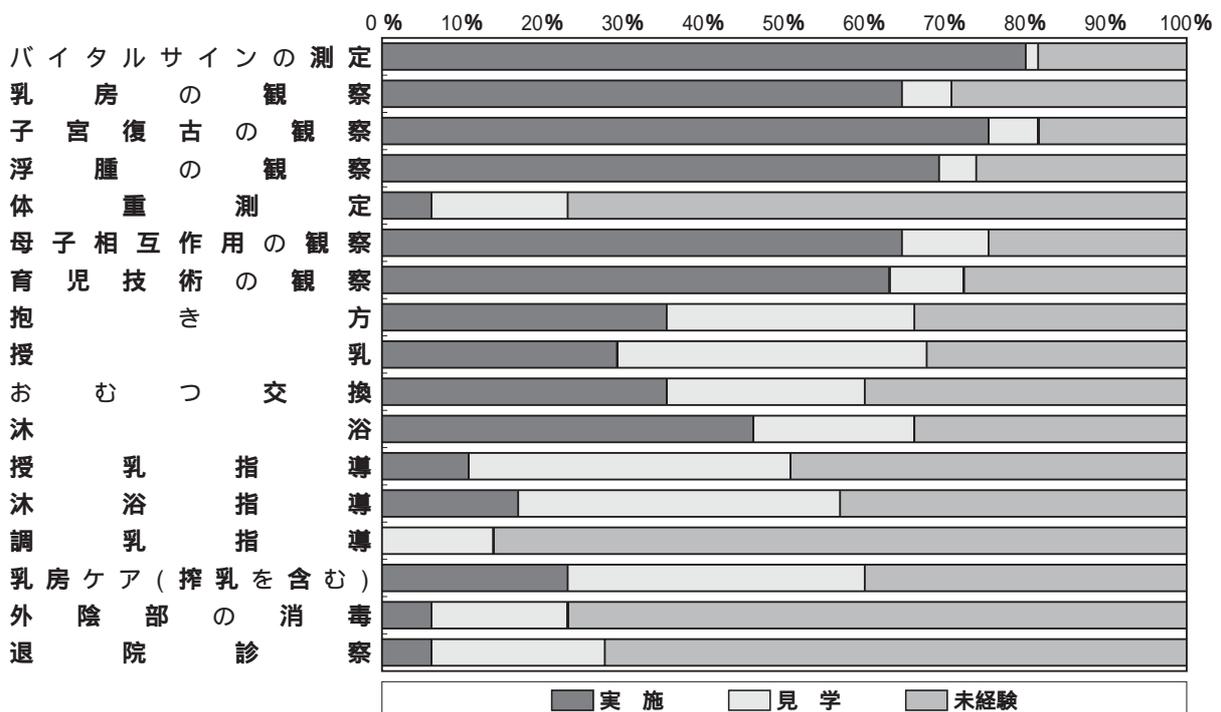


図3 産婦に対する看護技術の経験状況

4) 新生児に対する看護技術の経験状況

新生児を対象とした技術は18項目で、観察に関連する技術8項目、援助技術6項目、与薬の介助1項目、診療の介助3項目である。

実施経験の多かった看護技術は、「バイタルサ

インの測定(体温・呼吸・心拍の観察)」で60名(92.3%)、「一般状態の観察」「経皮的黄疸の観察」「おむつ交換」「衣類の着脱」が56名(86.2%)であった。診療の介助に関する3項目はすべて見学を中心とした技術であり、「先天性代謝異常検査」

「聴力検査」各29名 (44.6%)、「退院診察」23名 (35.4%)であった。経験の少なかった項目は、与薬の介助である「K2シロップの投与」で実施および見学をあわせ7名 (10.8%)であった。図4は、新生児に対する技術の経験状況を示したものである。

4. 外来実習における看護技術の経験状況

外来実習では、妊婦の健康診査を中心に実習を行った。技術は11項目あり、観察に関連した項目8項目、

診察の介助2項目、保健指導の見学1項目である。

実施経験の多かった技術は、「血圧測定」65名 (100%)、「超音波検査時の介助」59名 (90.8%)、「診察の介助」58名 (89.2%)であった。見学で多かった看護技術は、「子宮底測定」62名 (95.4%)、「腹囲測定」63名 (96.9%)、「浮腫の観察」47名 (72.3%)であった。また、未経験の割合が多かった項目は、「ドップラー法による胎児心拍の聴取」26名 (40.0%)、「保健指導の見学」20名 (30.8%)であった。実施および見学をあわせてみると「血圧測定」と「子宮底測定」の

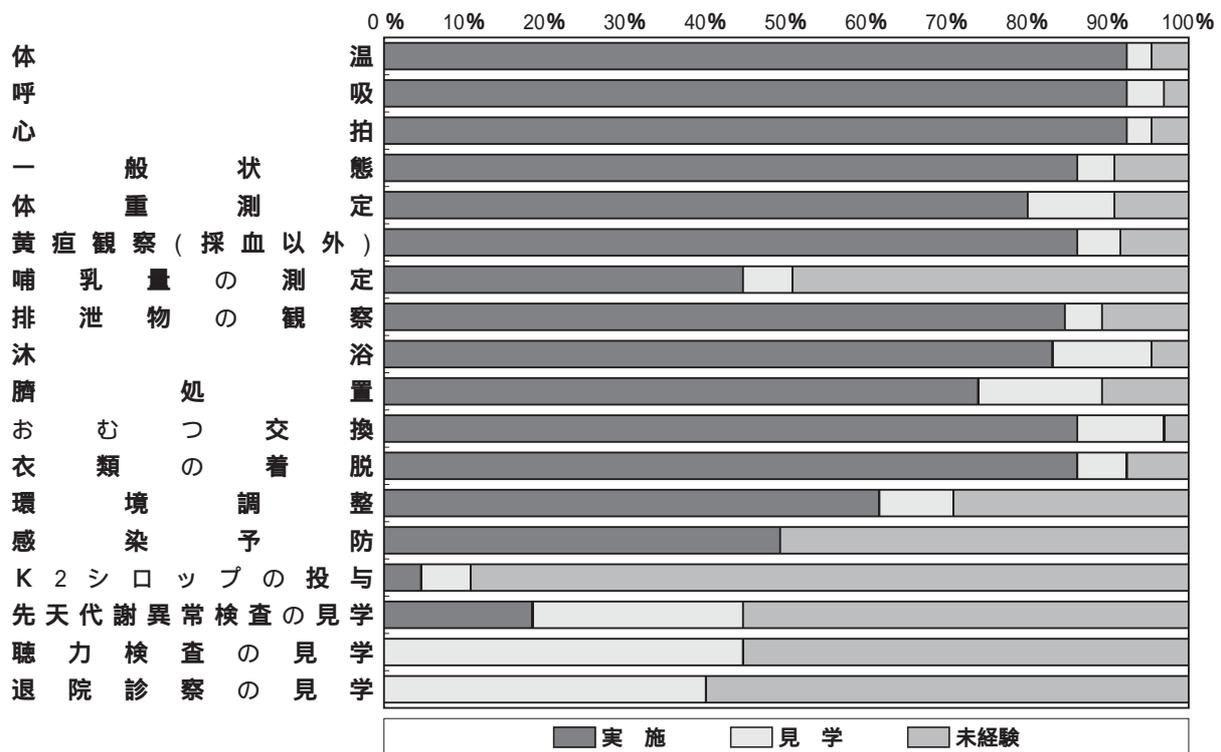


図4 新生児に対する看護技術の経験状況

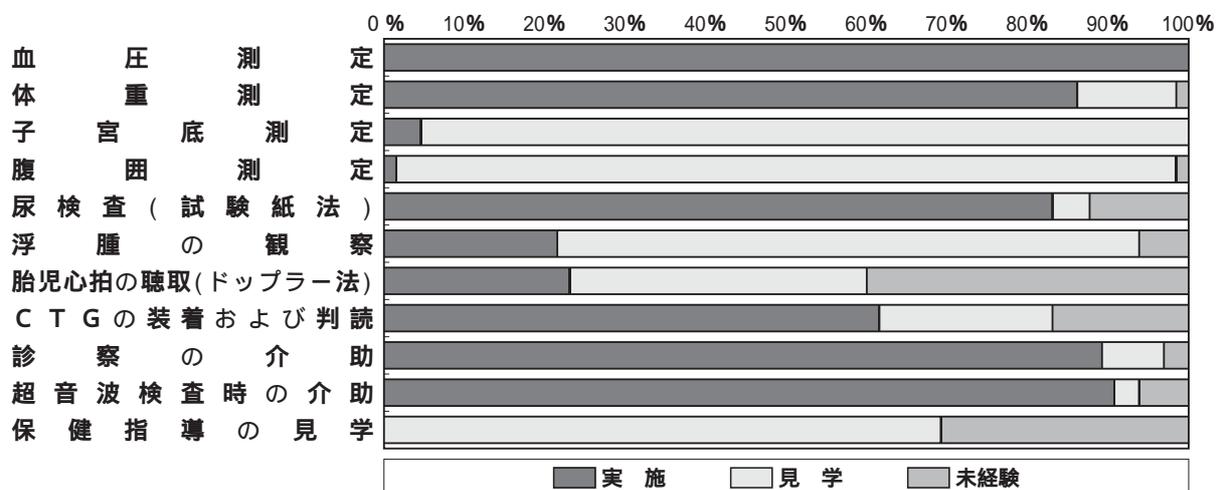


図5 外来での看護技術の経験状況

表3 実習場所・対象別にみた経験割合80%以上の項目数の比較

		項目数	実施	見学	実施+見学	未経験
病棟 実習	妊婦	13	0	0	0	8
	産婦	17	0	0	0	8
	褥婦	17	1	0	2	1
	新生児	18	10	1	11	0
	小計	65	11	1	13	17
外来実習		11	5	2	9	0

2項目は、全学生が経験した項目であった。図5は、外来実習で妊婦に対する技術の経験状況を示したものである。

5. 実習場所・対象別にみた経験割合80%以上の項目数の比較

76項目のうち実施経験割合が80%以上の項目数をみると、実習場所別では、病棟実習は65項目中11項目(16.9%)が該当し、外来実習では11項目中5項目(45.5%)であった。また、対象別では、新生児に関する技術で18項目中10項目(55.6%)が該当した(表3)。

考 察

看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書¹⁾では、学生が看護技術を実施する際の水準を「教員や看護師の助言・指導により学生が単独で実施できるもの」「教員や看護師の指導・監視のもとで実施できるもの」「原則として看護師や医師の実施を見学するもの」以上の3つに分類している。今回の調査に用いた経験録は、実施または見学別の記載であり、記載は学生の自己申告によるものである。そのため、実施と記載した項目が「教員や看護師の助言・指導により学生が単独で実施できるもの」「教員や看護師の指導・監視のもとで実施できるもの」とは区別できない。しかし経験録に挙げた項目は、母性看護に特有の技術を示したものであり、学生が臨地実習において看護を実践する場合には、必ず教員もしくは指導者の指導・監視のもとで実施してきた。これは、看護を提供される対象者の安全性・安楽性を保障するとともに、学生が単独で実施できるようになるためには時間的制約があるからである。

1. 母性看護学実習における対象の特徴

保健師助産師看護師法では、看護師は「傷病者若しくはじょく婦に対する療養上の世話又は診療の補助を

行うことを業とする者」と定義されている⁵⁾。そのため母性看護学実習では、可能な限り褥婦と新生児(1組の母子)を受け持つことができるよう実習指導担当者として調整を行っている。しかし、実際には12名(18.5%)とおよそ2割の学生は、受け持ち対象が妊婦である。また、1組の母子を受け持った場合であっても産褥期の入院期間は5日間と短く、経産婦の場合には4日で退院となることもある。産褥期の入院期間が短いため、実習開始日の産褥日数によって受け持ち期間もおおよそ決まってくる。実際に、学生の受け持ち期間をみると、妊婦を受け持った学生よりも褥婦を受け持った学生のほうが受け持ち期間は短く、さらに妊娠期あるいは分娩期から受け持った場合には、産褥・新生児の退院を前に実習が終了してしまう場合もある。

しかし、母性看護実習の対象のうち褥婦や新生児では、身体的には生理的变化がわかりやすいという特徴がある。たとえば褥婦を受け持った場合には、学生は腹壁上から産褥子宮を直接触れることができるので、自分の手を用いて産褥子宮の復古状態を観察できる。また、産褥入院中の乳房の変化は著しく、授乳時間ごとに乳房の緊満状態や母乳の分泌状態は変化するため、学生は1日の実習で少なくとも2回は観察が可能である。さらに、授乳時には母子両者の観察もできる。新生児では、生理的体重減少や生理的黄疸などの変化は、体重測定や経皮的黄疸の測定を実施することで数値として変化が理解できる。特に、生理的黄疸では、学生は新生児の皮膚の黄染を直接自分の目で観察できる。

このように、褥婦や新生児を受け持った場合には、学生自身が観ることや触れることを通して、知識と技術を統合し看護の実践能力を習得しやすいという特徴がある。特に病棟実習の4日間は、受け持ち以外の対象者にも看護の実施あるいは見学ができるよう指導者と調整し、学生が主体的に実習できる機会を設けた。また、実習室を常時開放し、実施の前に学生各自が学内で技術演習ができるようにした。

さらに、日々のカンファレンスやケースカンファレンスでは、学生自身が体験した看護実践について、学

生自身の言葉で表現してもらうことで、グループの学生全員が受け持ち対象以外の看護について考え・共有できるようカンファレンス運営の工夫も行った。妊婦・産婦・褥婦・新生児と母性看護の対象は多岐にわたり、一人の学生が臨地実習で実践できる看護には限界がある。しかし、学生が臨地実習で体験・実践できなかった看護に対しても興味や関心が持てるようになることは、『看護ケア基盤形成の方法』の学習項目にある、「看護の展開方法」「療養生活支援の方法」「人間尊重・擁護の方法」「援助的人間関係形成の方法」「健康に関する学習支援の方法」「健康管理支援の方法」「チームワークの基本とマネジメント方法」「成長発達各期の支援方法」の理解を促進することにつながると考える。

2. 対象別にみた技術の経験状況

病棟実習での学生の看護技術の経験状況をみると、新生児に対する実施状況が多く18項目中10項目(55.6%)において80%以上、すなわち52名以上の学生が実施できた項目である。正常新生児の看護では、清潔の援助として毎日沐浴を行う。実施割合の高かった10項目は、いずれも新生児の沐浴を行うときに付随する技術であり、単に「新生児の沐浴を行う」のではなく、沐浴を行う新生児の健康状態を観察し、観察結果をアセスメントし沐浴を実施するという思考過程と技術が統合された結果であると考えられた。しかし一方で、環境調整や感染予防の実施率は、それぞれ61.5%、49.2%と低い。実際に沐浴を実施する際には、沐浴室の環境の確認や手洗いなどの感染予防に対する教員の指導があったにも関わらず経験録への記載ができなかった。これは学生自身が環境調整や感染予防に対し意識できなかったことを意味し、意図的に関わることを強化する項目である。

また、褥婦の受け持ちは、累積で53名(81.5%)であるが、実施および見学をあわせるとバイタルサインの観察と子宮復古の観察が81.5%の経験率であった。褥婦を受け持った場合には、産褥の健康診査として、乳房の観察や浮腫の観察もあわせて実施あるいは見学できる項目であるが、これらの項目も意図的に関わることを強化する項目である。

分娩期からの受け持ちは、累積で17名(26.2%)であるが、分娩を見学できた学生は34名(52.3%)であった。分娩の見学では、受け持ち学生以外であっても可能な限り分娩第1期後半から産婦のケアに参加するようにしている。産婦のケアでは、常時指導者が教員が付き、触診による陣痛の測定や胎児心拍の観察、呼吸法や産痛緩和を含めた日常生活の援助を行っていた。しかし、陣痛のため苦痛様の表情で痛みを訴える産婦

を前にすると、学生自身も緊張や戸惑いを見せる場面も少なくなかった。そのため、学生がケアの提供者の一員であることを意識できるよう、学生の情緒面への配慮をさらに強化することが必要であると考えられた。

また、出生直後の観察である「付属物の観察・諸計測」は、その後の母子のケアを行ううえでも重要な項目である。実習期間中は、分娩見学は19時まで実習時間を延長し、可能な限り分娩見学の実習ができるよう調整してきた。しかし、実際に分娩見学実習のできた学生は34名(52.3%)と半数あまりであった。実際に分娩を見学できなくても、付属物とくに胎盤は妊娠中の母子の健康状態をアセスメントするための重要な情報である。実習時間内に分娩見学ができない場合であっても、夜間に分娩があれば翌日の実習で観察可能な内容であるため、機会を逸することなく可能な限り経験できるようにしたい項目である。

病棟実習の妊婦を対象とした技術で経験率が高かった項目は、「CTGの装着および判読」で実施および見学をあわせると47.7%であった。この項目は、外来実習の経験項目にもあるが、妊婦健診をうける妊婦全員に行われる項目ではない。しかし、外来実習での経験率は83.1%と8割以上の学生が経験できた項目であった。「CTGの装着および判読」は、病棟あるいは外来のいずれかで、経験できるよう各実習場所を活用し、全学生が経験できるようにしたい項目である。

外来実習では、全学生が妊婦を必ず受け持つ。妊婦健診では、「血圧測定」「体重測定」「超音波検査時の介助」は、全員が実施できる項目である。また、「子宮底測定」「腹囲測定」「浮腫の観察」は医師が実施し、「保健指導」は助産師が実施しているため、全員が見学可能な項目である。しかし、これらの項目で100%であった項目は「血圧測定」「子宮底測定」の2項目である。特に、「保健指導」は、69.2%が見学と記入したに過ぎなかった。保健指導は、学生が血圧測定や体重測定を行っている場面や医師の検診終了後に行われることが多いため学生には意識しにくいかもしれない。しかし、看護を学ぶことは、コミュニケーションを基盤にした人間関係能力の育成でもある。学生がそのことを意識して妊婦と関わるができるよう動機付けていく必要がある。

3. 臨地実習における学習効果をたかめるための今後の課題

臨地実習という場合は、学生にとっては、それまで学習していた学内での状況とは一変した環境であり、その場に適応するにはかなりの時間を要する。たとえば、人間関係をみると学内では、「学生同士の関係」「教員

との関係」と比較的限定された関係である。しかし、臨地実習の場では、「受け持ち対象との関係」「実習施設の医療職（看護師、助産師、医師、その他多数）」「指導者との関係」「教員との関係」と複雑になり、この点だけでも学生にとっては非常にストレスフルな状況である。加えて、講義や学内実習で学習したことを受け持ち対象に直ちに実践することは困難である。

特に、母性看護の対象である妊婦・産婦・褥婦・新生児は、基本的に健康な人であり、妊娠・分娩・産褥・新生児期の生理的变化の促進や親になる過程を支援する看護が中心である。また、対象者の生理的变化は、時間とともに刻々と変化していくことも特徴である。このような状況で、臨地実習を行う学生が効果的に学習するためには、教員や指導者が学生一人ひとりと1対1の関係を基盤とした教育を行う必要がある。特に、産婦を受け持った場合には、分娩経過とともに刻々と変化する産婦の反応に緊張や戸惑う場面も多いことから、学生に対しては情緒面での支援と同時に、学生自身がケアの提供者の一員であることに気づけるよう教員が看護職としての役割モデルとなることも必要である。

さらに、今回の調査では、「環境の調整」や「感染予防」について、実習中にもわれわれが直接的に指導し、かつ実施しているにも関わらず経験録に記載できなかった学生が多かった。これらの項目は、母性看護学実習に特化した技術ではなく、対象の健康状態や年齢等に関わらずあらゆる分野に共通する項目であり、習得すべき項目である。学生が臨地実習という動的環境において、これらのことに学生が自ら気づき実践できるようになるためには、あらゆる機会を通して、その都度、学生自身が気づけるような教員からの問いかけが必要であると思われる。

．おわりに

今年度3年生の母性看護方法論の演習では、1グループを11～12名として6グループを編成し、対象別（妊婦・産婦・褥婦・新生児）にプログラムを作成し実施した。妊婦の健康診査やCTGの装着や判読、新生児の沐浴では状況を設定し、単に技術の習得ではなくケアの実施過程として演習ができるよう工夫した。3年次の学内実習では、モデルを使用しての演習であるため限界はあるが、4年次の臨地実習につながるよう今後も検討していきたい。

文 献

- 1) 厚生労働省医政局看護課：看護基礎教育における技術教育の在り方に関する検討会報告書，p3，2003
- 2) 看護学教育の在り方に関する検討会報告書：大学における看護実践能力の育成の充実に向けて。文部科学省高等教育局医学教育課，2002
- 3) 看護学教育の在り方に関する検討会報告書：看護実践能力の充実に向けた大学卒業時の到達目標。文部科学省高等教育局医学教育課，2004
- 4) 秋田大学医学部保健学科看護学専攻：実習要項
- 5) 門脇豊子，清水嘉与子，森山弘子：看護法令要覧 平成18年版。日本看護協会出版，東京，2006，p3
- 6) 田中美紀子，松永貴美子，田村玲子：母性看護技術演習の評価とユニケーション効果。第37回日本看護学会看護教育：p95，2006
- 7) 中田かおり，佐々木和子：助産教育の学内演習における基礎・母性看護技術演習の必要性 学生への質問紙調査による学内演習の評価。国立看護大学校研究紀要5(1)：pp67-71，2006
- 8) 三井美恵子：母性看護学実習における看護技術の実施状況。東京厚生年金看護専門学校紀要8(1)：pp53-59，2006
- 9) 小泉仁子，日下和代，千葉由美他：看護実践能力育成の充実に向けた電子媒体による技術チェックリストの検討。看護教育46(1)：pp13-22，2005
- 10) 新井香奈子，中里佐智代，後藤美子：母性看護技術到達度の認識に関する調査 看護師教育単独校と助産師教育併設校の臨床実習指導者の比較から。看護教育45(12)：pp1100-1105，2004
- 11) 前田規子，中尾優子，宮原春美他：看護基礎教育における母性看護学実習の展開。長崎大学医学部保健学科紀要15(1)：pp61-67，2002
- 12) 川崎郷子：看護基礎教育における母性看護技術の到達度 病院看護職員と教員の期待に関する検討。母性衛生42(2)：pp333-339，2001
- 13) 宮本政子，野口純子，竹内美由紀他：母性看護学実習における学生の実習意欲に関する要因 実習に対する意識と実習評価から。母性衛生42(1)：pp198-206，2001
- 14) 小山田信子，杉山敏子，河本亜希子他：看護学生の母性看護実習領域における看護技術経験状況の調査：東北大学医療技術短期大学部紀要10(1)：pp41-50，2001
- 15) 渡邊竹美：5 臨地実習において学生の教育効果をたかめるために（第8章B助産師の基礎教育）。新版 助産師業務要覧。遠藤俊子・他 編，日本看護協会出版会，東京，2005，pp275-278

- 16) 杉森みど里, 舟島なをみ: . 看護学実習展開論 (第5章 看護学教育授業展開論). 看護学教育 第4版, 医学書院, 東京, 2004, pp245-291
- 17) 宮地緑, 星和美, 藍原キヨミ: 第1章 臨地実習の基本的な考え方. 看護学臨地実習ハンドブック 基本的な考え方とすすめ方 改定第3版. 松木光子・監修, 金芳堂, 京都, 2003, pp1-26

Investigation into students' realization of the experience of maternal nursing skills

Emiko NARITA Takemi WATANABE Akiko NUKAZUKA
Hitomi SHINOHARA Hideya KODAMA

Course of Nursing, School of Health Sciences, Akita University

The aim of this study was to investigate the experience of maternal nursing skills of nursing students of our University, and to enhance learning in the maternal nursing practice program.

We listed 76 items of maternal nursing skills relating to pregnant, parturient and puerperal women and newborn infants, and our nursing students recorded their actual experiences during maternal outpatient or inpatient ward training. The results showed that the students experienced care of newborn infants most commonly, and more than 80% of students practiced 10/18 items relating to newborn care (11 items including observation). In the outpatient ward training, 5/11 items were practiced in more than 80% of students (9 items including observation). For outpatient training, over 80% of students practiced 5/9 items (9 items including observation).

However, some students did not record either some maternity nursing skills that they had actually practiced or observed, and there is a need to deliberately emphasize the meaning and importance of such experiences.